

いずみ

令和8年度 7月号
図書委員会 2年2組
泉 敬翔 ・ 平岡蒼大



期末考査も終わり、ほっと一息という人も多いことでしょう。もうすぐ夏休みですね。夏休みは、普段よりも多くの時間を、自分のために使うことができます。ぜひ、図書館で本を借りて、自分の世界を広めてみませんか？今月は、各学年主任の先生方がお勧めの本を紹介してくださっています。さらに、2026年本屋大賞受賞作品の中から、図書委員さんのお勧めの本も紹介してくれています。

必見です!!



【学年主任おすすめの本】



『スピノザの診察室』『エピクロスの処方箋』 著:夏川草介

(3年学年主任 曾我部幸子)

夏川草介さんの本をお薦めします。夏川さんは、地域医療に従事する現役の内科医です。また、ペンネームに好きな作家や作品名を入れるなど、文学をこよなく愛する人でもあります。【夏目漱石・川端康成・草枕(夏目漱石)・芥川龍之介】

代表作の「神様のカルテ」シリーズは、地方病院を舞台にした医療小説ですが、登場人物がとても魅力的で、漱石の言葉もたくさん出てきて心が温まります。「レッドゾーン」はコロナ禍での医療現場の様子が、経験を元にリアルに描かれています。特にお薦めしたいのが「スピノザの診察室」と、「エピクロスの処方箋」です。将来を嘱望された優秀な内科医が、訳あって地域病院で勤務することになり、死や終末医療と向き合っていきます。哲学的な内容があって少し難しかったり、理想論すぎるかなと思ったりする一面もありますが、それら全てがたまたま魅力的です。舞台が京都で素敵なお菓子もたくさん出てきます。心地いい読後感と共に、人生についていろいろ考えることができるので、多くの人に読んでもらいたい本です。また、本屋大賞にノミネートされ映画化も決定しました。キャストを考えながら読むのも楽しいかもしれませんね。図書館にもありますので、ぜひどうぞ。

『夜のピクニック』 著:恩田 陸

(2年学年主任 能田 新)

今まで勤めてきた学校で、読書感想画コンクールに応募する中で、最も印象に残っている本が、恩田陸 著「夜のピクニック」です。自由読書部門で大変人気があり、生み出される生徒作品も魅力的でした。「みんなで夜歩く。ただそれだけのことがどうしてこんなに特別なんだろうね」という登場人物の台詞は、当時からいいなあと思っていましたが、私自身は実は読んだことがありませんでした。今回機会をいただき、北高図書館で「夜のピクニック」をお借りし、初めて読み切ることができました。今まで何百人が手に取ってきたんだろうと思うような読み込まれた様子で、ページがちぎれかかっていたりもしましたが、1ページも欠けることなく、表紙のカバーには補修した跡もみられ、北高生に長く親しまれてきた様子が伺えました。また、物語の舞台も「北高」であることを読んでみて初めて知り、大変共感を持ってました。普段、教員として高校に勤務していますが、この本を読むと、生徒の視点からの高校生活を垣間見ることができ、はっとさせられるとともに、この作品が「永遠の青春小説」として絶賛される理由がよくわかりました。ぜひ手に取って味わってほしい1冊です。

『ガラスの海を渡る舟』 著:寺地はるな

(1年学年主任 三ツ田めぐみ)

この作品は、ガラス工房を営む兄の道と妹の羽衣子の10年間の、二人の視点で交互に綴られています。道はコミュニケーションが苦手で、人と協調できません。羽衣子は何事もそつなくこなせますが、特別な何かがないことにコンプレックスを持っています。そして、「ふつう」ではない行動をとりがちで、母の注意が向いている道と衝突が絶えません。作品制作や依頼者との対話を通して、次第に道と心を通わせていきます。この作品は、私たちに「ふつうとは何か」を問かけます。道ができないことを責めず、どうしたらできるかを一緒に考える祖父の「ひとりひとり違うという状態こそが『ふつう』なんや。『みんな同じ』のほうが不自然なんや。」という言葉が象徴しています。自分の「ふつう」が覆される苦痛や不安を乗り越え、関係を構築すること、喪失の苦しみの受け止め方や自分との向き合い方など、物語を通して様々なことを考えさせられます。しかし、2人の恋愛模様や制作に励む姿も描かれ、読後感は爽やかです。世間(これも不確かなものです)の「ふつう」に居心地の悪さを感じる人、自分の世界を広げたい人にぜひ読んでほしいです。寺地さんの『水を縫う』もお勧めです。

7月13日(月)以降は、夏休み期間として、一人5冊まで本を借りることができます。普段忙しすぎて本を読めない人も、のんびり読書の夏はいかがですか。

【返却日は2学期始業式の8月27日(木)です。】



《本屋大賞作品の中から図書委員おすすめの一冊！》

本屋大賞 第4位 『エピクロスの処方箋』 著:夏川草介

～あらすじ～

主人公は原田病院で内科医として勤務する雄町哲郎、愛称「マチ」。まもなく40歳を迎える彼はかつて、大学病院で将来を嘱望された優秀な医師だったが、現在は若くして亡くなった妹の子を引き取り、原田病院で地域医療を支える日々を過ごしている。ある日、マチのことを高く評価している大学准教授の花垣から非常に難しい手術を依頼される。患者は退局するマチに対して苛烈な態度を取り続け、大学医局への立ち入り禁止を命じた洛都大学教授、飛良泉の父親だった。過去の因縁や医局との複雑な関係などの様々な問題を抱えながらもマチは困難な症例に立ち向かっていく。医師としての葛藤や患者へ寄り添う責任、自らの過去そして亡き妹に代わって甥の幸せを願う思い。それらすべてがエピクロスの哲学と重なりながら「幸せとは何か」という一つの問いへと収まっていく。これは現代の医療と人々の人生を見つめ直す物語。

～おすすめポイント～

この本は医師である夏川さんの実際の現場での経験などをもとに地域医療の現状がリアルに描かれています。この本を読んでいて、少子高齢化の中で高齢者の終末期医療の大変さや患者の心身のケアの難しさなどがよくわかり、今の日本の医療体制が変化しつつあることを痛感させられました。また、話の途中途中でマチ先生の優しさが垣間見えていて、本の中でも外でも模範となるような医師だと思いました。そして、この本は現在映画化が決定している前作、『スピノザの診察室』の続編ではありますが、前作を読まずとも登場人物の設定や話の内容が分かるように書かれているので前作を読んでいない人も十分楽しめると思います。ですが、読んだ人はより一層楽しむことができると思うので、しっかりこの本を最初から最後まで読もうかなと考えている人は、前作を読んでから読むことをお勧めします。また、この本は医療系の内容なので、しばしば医療用語が出てきます。そのまま読んでも面白いですが、出てきた医療用語を調べてどのようなものなのかを理解しながら読んでみるとまた違った面白さに気付くことができると思います。現代の医療の在り方だけでなく、「幸福とは何か」、生きていることだけが本当の幸せなのか、治らない病気を患ってしまった人は幸せではないのかという哲学的な部分にも触れることができる本なので是非一度手に取って読んでみてください！

(図書委員 平岡蒼大)

《図書委員おすすめの本 part3》

書名	作者名	おすすめの理由	図書委員
坂の上の雲	司馬遼太郎	北高とも縁深い秋山好古が登場する小説です。北高生なら一度読んでみる価値あります。	307
魔女の宅急便	角野栄子	小さい頃に見たことがあるであろう魔女の宅急便。大人視点で読むと子供の頃の気づかなかった考えなどが浮かび、二度楽しめる物語だと思います。	307
この気持ちもいつか忘れる	住野よる	見えないけれど、声は聞こえる…。高校生のカヤは異世界に住む少女と出会い、たくさんの話をします。透明人間の少女は、なぜこの世界に来たのでしょうか。彼女と出会って成長したカヤは、どのような行動が取れるようになるのでしょうか。THE BACK HORNさんによる書下ろし楽曲も付いてきます。ぜひ、小説×音楽のセットでお楽しみ下さい!!	308
二木先生	夏木志朋	ある「普通」に馴染めない一人の高校生が人気が高い一方で、周囲とズレている美術教師との危険な取引から始まる。二人の関係性や、やり取りの緊迫性が面白いです。臨場感があるので、ページが多い中スラスラと読めます！ぜひ読んでみてください!!	308
後宮の烏	白川紺子	この本は、後宮の中で特別な立場にある「烏妃」の部屋へ悩みを持つ人々が訪れ、宮中で起こる不可解な出来事を解決していく中華ファンタジーです。図書館にあるのでぜひ手に取ってみてください。	309
こころ	夏目漱石	心に響く名セリフが豊富で、物語に引き込まれます。登場人物の複雑な心理を考察するのが面白く、読んだ後の語り合いが盛り上がる一冊です。	309